

# 大陸(中支)

## 大東亜戦争参戦思い出の記

山形県 小野清次

応召入隊は昭和十九年三月二日。同日朝八時集合、村長の励ましのお言葉を戴き、白田圭次、小松又一と私の三人で、私が代表で答辞とお願いを申し上げた。各種団体の見送りと万歳の声、音楽隊に送られました。午後二時、山形第三十二連隊に入隊。軍服に着替え、軍装備品を渡され、駅前の「村木沢谷旅館」の宿舎に入り、各自の持ち物の名札付けに夜中までかかりました。翌日、朝食後、連隊に戻り、兵器等が渡され、部隊編制軍装検査を終わり、午後九時に営門を出て出征

しました。

山形駅前で待機、三月四日午前三時十五分、先発隊として発車、関門トンネルを経て、門司港で谷沢部隊と一緒に乗船したのは三月六日でした。船は「宇賀丸」四、七〇〇トンの貨物船で、出港準備で忙しい。

三月六日出港、途中、敵潜水艦の潜望鏡が見えたとの歩哨の報告に、飛行機が飛び回り、歩兵砲もたくさん発射され、我々は救命具を着けて待機しました。大騒ぎしましたが事もなく済み、安堵しました。歩哨は殊勲甲で二階級進級でした。揚子江を船でさかのぼり、南京城宿舎に入ったのは三月十四日、行軍、対空演習等で忙しい毎日でした。「宇賀丸」は私らが下船後三日目に揚子江で敵魚雷に撃沈されたと報ぜられ、戦争の厳しさをまざまざと感じました。ここは水の少ない

町で、入浴はまるで泥水湯の感でした。

安徽省蕪湖の町まで貨車便で出発したのは四月三日でした。停車場での入浴はとても気分が良かったことを思い出します。そこで私は初めて歩哨につきました。そして連行馬と荷車が渡され、大山伝七君が馬掛となり、武漢地区まで一カ月予定で揚子江を右にみながら連日の行軍により到着、連行馬と荷車を武昌の部隊に返納しました。

葛店鎮は、これから第一線になるとして清酒「桃源」とつまみなどの下給があり、夜宴が開かれました。

武昌に着いたのは五月十日、宿舎は大東亜寮で、連夜、満州からの南下部隊の靴音で眠れなかった。いかにこの作戦が大きいかがひしひしと感じられました。二十五日に再び出発しました。漢口、咸寧と船で往來する勤務で、自動車隊が途中から便乗し、夜中十二時に湖北省崇陽に着きました。

崇陽は後藤兵站があり、一・二・三班勤務で世話になりました。六月二日九時半ごろ、敵機十四機の大空襲があり、八回にわたり連続暴爆による爆弾投下され

る度に体が宙に飛ぶようなひどいものでした。もう食事どころでなかった。夕刻、某中尉より一握りの乾パンが分配されたが、ともうまかった。夜食炊飯伝令があり、夕食を食べたのは十時過ぎでした。暴爆の犠牲者は神田軍医大尉以下、下士官一人、兵三人の五人で、住民にはたくさん犠牲者があり、戦争のみじめさを改めて知った初めての体験でした。

きゅうりの花が実って食べごろになり、漬物にしたいが塩がなく、塩気のない漬物を食べたことも思い出です。

栗橋の街で、庄司正君が体調を崩し、入院、そこで別れました。

長沙の街は長い街で、三回と小休止して通り抜けたほです。日射病の患者も三名も出て、一人は即病死、二人は入院となりました。攸縣では兵站の結城支部開設の命令でしたが予定通り進めず、途中、二日も滞在したほです。

攸縣に入ってみるとそこは大分荒れた街でした。暑さと蚊に悩まされながらの兵站開設中、敵襲があり四

日四晩の撃ち合いでしたが、茶陵より岩塩運びの輜重部隊に追い払ってもらい一安堵しました。そこで前進命令があり、敵状は悪く苦勞しながらの前進でしたが、勤務者は警備隊と森小隊一、二分隊、四班隊も一緒に、衡山の街に入りました。

衡山へは川を渡るのに工兵隊の筏で渡り、その間、待機空襲があつたが被害はなかつた。中村儀助君はひどいマラリアで入院し別れたが、後日病死と聞いて残念でした。復員後、私が連絡係となつて生家の中村三蔵氏（儀助君の父九十二歳）を訪ね、御仏にお参りし、いろいろとご報告しました。聞けば、四人が応召して三人戦死とのことで、もらい泣きました。

兵站の結城支部勤務では、支部長の当番勤務でした。野菜は全然なく、水は生石灰水で特にひどく、連日、鏡汁支部長以下全員大腸炎になり弱りました。ここで初めての給料をもらい、故郷へ送金しましたが、無事に到着していました。

衡陽の街までは自動車便乗で、クリークの多いところで連日爆撃にいじめられる。殊に私たち第七十一部

隊あて郵便物六十四梱包にも直撃弾を受け、郷里よりの郵便は全部なくなりました。また、同級生三郷甲の門脇正君は名譽の戦死となり、遺体監視・護送の任に当たりました。

株州本部との行軍では、敵の照明弾が投下されて、身動きできず鉄路付近で長時間待機した思い出があります。

新市では夜間一晩中前方の山頂よりノロシが上るとすぐ飛行機が飛んできて爆弾を投下する。敵は弾薬庫を目標とのことで、一晩中花火見物のようでした。朝方町に着くと住民の避難する群れに会い、自警団の反撃とのことで緊張しましたが、格別のことはなかつた。予定を変更し、山の中に設営した給与班の班長の軍刀が盗難に遭い、大騒ぎしましたが、後日再交付がかないました。

貨物廠に米はないとのことで、広い田圃を回り、早生稲を見つけ雑囊を空にして全員で穂先十粒程度あて掻き集め、乾燥して夜十時ころまでに米をこしらえて食べたがともうまかつた。今度からは食べることに

は心配ないと一同喜び合った。

黄砂舗は河水は清く、稲の出来の良き、松林らしい樹木が点在し、気分的に内地のような町でした。粳米は全然なく、糯米だけでした。窮すれば通ずで、ブリキ缶で釜やセイロを作り、ボタ餅、フカシ飯、笹の葉での笹巻などを作り食べ、さつま芋をふかしたり、小豆、ゴマを見つけて調味料として食べました。

祁陽山<sup>き</sup>辺の田舎街でした。佐竹曹長殿が入院するため別れました。支那カミソリを見付け長い間利用しました。

全県では自動車隊渡河作業に協力、連夜の勤務です。勤務者全員、編上靴を交換してもらったことは何よりも嬉しく、今度はどこまで行軍しても大丈夫と非常に喜びました。

馬橋の街は今までと違い大旱魃地帯で、田圃は五センチほどもある亀裂が生じ、水はなく、一キロほどある所までもらいに行く苦勞をしました。

前進して着いたところは桂林の街で、市街に十数カ所も石山の突起があるのに、敵は皆横穴を掘って狙い

撃ちをし、戦闘部隊はいかに苦勞をしたかが想像されました。火力発電所もあり、至る所に鉄条網が張られ、河水はきれいだ<sup>ど</sup>が土左衛門<sup>どざえもん</sup>が沢山浮び、防空壕には五六十人ほど、一般住居でも五十三人の中国兵が防毒面を手にして死んでいる。至る所で地雷工兵隊の搜索が行われ、花火大会のようにドカンドカ<sup>ン</sup>でした。陥落したのは十一月三日で、私たちの兵站開設部隊は四日に入城でした。

一カ月半ぐらい滞在、将校単独宿舍勤務でした。鈴木軍曹以下大泉、宇津井、小野寺、小野の五人で接待役を命ぜられ、軍司令官閣下、部隊長以下将校の接待です。新しいニュースや珍しい品を戴いては、皆で馳走になることはとても楽しいものでした。

中国の病院より布団、綿入り服などをもらってきたり、自分たちの部屋作りをし、故郷を出発以来の布団で寝たことは例えようのない心地良いものでした。

十二月八日、荔州舗着。ここから反転出発しましたが、ここでは十二月二十八日までの長い滞在でした。

中国人四人を使つての勤務者七十数名の炊事勤務でし

た。若い十七歳の中国少年を相手に方言ではあるが言葉の勉強をし、どんなことでも話せるぐらいになり、重宝がられました。敵味方でも情には境なく、別れるときには煙草五〇本、金五〇〇円の餞別をもらつてきた四人の兄公も一緒に反転出発、彼らの故郷近くで別れました。

お正月には、停戦協定があり、支部令によりあらゆる限りの馳走を作るようにと、一人八皿あてのいろいろな料理作りをし、ただ飲物だけはチャン酎で、勤務者全員が一同に会してでありました。殊に納豆餅のあんばいの良さはみんなに喜ばれた。

宇津井、稲毛、荻野の三人は貨物廠へ転属して別れたのが、残念。補充に酒木、瀧田が入りました。

点呼後、老夫婦が田植えをしていたのに「オーデタアタ ナーベンリーペンでメイベイ アンデーガン ホーレンブルーレン」というので「シンシン タアタテンホ」と一緒に往復田植えして大変感謝されました。おそらく敵農民に混じつて田植えした方はないと自負しています。

柳州より本隊の反転を待ち、合流して出発しました。爆撃にあつたのですが、折よく高射砲隊が滞在していたため大きな被害なく過ぎました。殊に反転中は前進中と違い、十日行軍一日滞在で、滞在日は米ごしらえの状態でした。

祁陽では難民八百人ほどが着いてきて煙草の火が見付けられ、敵機の直撃弾を受け、部隊では大沼君が破片頭部負傷のほか戦死者も数名、難民は数十名もやられました。やはり軍隊は運隊で、運不運は紙一重というが、そのとおりとつくづく感じさせられました。

反転、全県前進中、入院した庄司君が本隊復帰となり再会、お互い手を取り合つて喜びました。以後、復員まで同一行動でした。

長沙で終戦。ここでは敵状が悪いから大部隊と合流して出発することとなり、弾部隊と一緒に往復して出発しました。藁木正四班長がマリアアで入院、後任に一四から清野班長となる。また終戦日の翌日、中国兵の入場式とて鐘・太鼓で賑やかなのには驚きました。小松軍曹以下五名が弾部隊本部付きとなり、命令受領

連絡兵に任せられ、部隊長副官の馬がフーフー私の肩に首をこすりつつの行軍の途中で軍旗奉焼式にも遭った。

御銃の紋章抹消令が出て無条件降服とは本当だと感じました。勤務者は小松軍曹以下五人で、次々と入る情報に今後の不安は募るばかりでした。

咸寧着は九月十二日で命令解除、本隊復帰しましたが、すぐ出発隊に編入され、武昌の大東亜寮に収容され、直ちに司令官（米沢出身）配下に編入されました。「管兵名札一九五五号」となり乗船番号であるのとこのとて大喜びしたのも束の間、咸寧の本隊復帰となり、名札は十二万台となり落胆しました。それは武装解除直後のこと。その間、編上靴の山、漢口は被服の山、停車場、事務用品と連日、保管や歩哨勤務の連続でした。たまたま金票交換等があり期間中は最高の幸福な過ごし方をしたのも思い出深いことで、隊長は中條中尉と二ノ宮中尉でした。

武装解除には各将校の軍力には家宝の名刀も沢山あって涙を流しての中国側に引渡し、涙ながらの別れの

状況には貰い泣きました。

本年は三十年ぶりの揚子江大旱水とて大型船が航行できず、乗船は上海と変更され落胆したのでした。そして咸寧では道路作業以外に製炭、中国側の病院建築とかの諸作業に就いたのですが、食糧不足には閉口し、食べられる野草はみな食べるといふ苦勞をしました。

出発は、いよいよ四月二十日でした。そして三度目の武昌大東亜寮は一万六千人からの人数の収容で、かつ支那側の飛行機がひっきりなしに飛び回り、生きた心地がしなかった。南京出発は昭和二十一年五月十一日、上海は五月二十五日乗船と確定になったが、雨期に入りひとしお苦勞しました。めぼしいものをもっていて中国側の検閲にひっかかると部隊全員乗船停止になると脅され、軍隊手帳はじめみな焼却させられたのでしたが、戦争のことは忘れられず、復員後、思い出しては記しておきました。

思い出を断片的に、記すと、

☆馬コー峽峠では八月の盛夏のなかの一晩中の行軍であつたため軍馬の死んでいた数はなんと五十六頭も

数えるほどでした。

☆行軍中無意識的に中国軍行路の一公里間を数えたら一四三五歩で三回繰り返すと小休止を楽しむ。

☆開襟シャツ、半ズボン、じゅばん、袴下だけの支給に、寒暖の節にそれぞれ苦勞工夫して凌いだ。

☆行軍中、田圃から藁を担ぎ込み、積み敷いて豚同様ガサガサと寝たとき、その暖かさは例えようもない。

☆連日の爆撃に苛められるなかで勤め果たした事。

☆鉄山舗では石山の間からの湧水の生水を飲んだ。

☆何といつてもわが部隊は地区別の編制であつたために大いに幸福であつた。

☆第七十一移動兵站開設部隊は、その名のとおり今度の作戦で初めて取り上げられた戦法だつたと聞く。

☆第七十一移動兵站開設部隊人員 一三四五名

転属入院戦病死 一一一五名

計 二四六〇名

☆進軍行路大略

河北省・河南省・湖蘇省・江蘇省・浙江省・安徽  
省・江西省・廣西省・廣東省・揚子江洞庭湖・湖

北省・湖南省

## 【解説】

執筆者小野氏は中支の兵站支部勤務であつた。昭和十五年五月という京漢作戦は終了し、第六方面軍の第十一軍が岳州南方より作戦を発起した頃である。

兵站とは、一般的には作戦軍に対し必要な軍需品を供給の補充することの総称である。作戦軍とその後方にある策源地との間を連絡し、連絡線上に所要の施設を施し、必要な機関を使用して、軍需の不足を補い、係累（手足まとい）を除くなど、作戦目的遂行のための諸般の施設とその運用をいう。時としてこれに必要な機関を兵站ということがある。

軍需品と馬の整備・管理・前送・補給・傷病人馬の収容後送・要整理物件の処理・戦地資源と施設の調査・利用・培養・通行人馬の宿泊給養・診療・背後連絡線の確保・占領地行政などを総称して「兵站業務」というと定義付けられている。

作戦遂行は戦闘部隊のみではできない。連合軍の兵

站補給等の業務と物量、輸送能力等は我が軍に比し格段優れていたことは、今次大戦で立証され、兵站補給情報などが敗戦の大きな要因であると反省されている。

兵站とは作戦前線と後方を結ぶ、いわば血管の動脈・静脈というもので血液を円滑に送り、また血液を清浄化する心臓を機能化する大切な任務、施設である。華々しい作戦軍は話題になるが陰の兵站の任務と功績は忘れ勝ちであった。

湘桂作戦の発起は昭和十九年五月下旬からである。南支は六月であるが例を中支戦線にとつてみる。

日本軍の最前線は洞庭湖にそそぐ新墻河であった。その基地は岳州と見てよいと思う。揚子江南岸を發した各部隊は南進し長沙を第一の攻撃目標とした。爾後、戦線は拡大し、衡陽攻略後の第二次作戦は八月下旬、九月上旬の発起であった。

以後、祁陽、零陵、東安を越え広西省に入り、全県、興安、桂林、柳州、來賓、南寧、仏印ランソンとなったのである。仏印への大陸打通は昭和十九年十二月末であった。戦線は一本ではなくその幅を広げての

作戦であった。その各兵団への補給路は膨大な距離であり、その要点にそれぞれの施設を設け、人員を配置し、軍需物資、兵器・弾薬も補給しなければならず、主要地には兵站病院、病馬廠貨物、兵器の支廠も設置された。

戦線が膨大になればなるほど兵站は充実をはからなければならぬ。そのため兵站地区隊、兵站整備隊、兵站勤務隊とそれぞれ配属されたのである。輸送には兵站輜重、兵站自動車、船舶、鉄道も必要とされた。

第六方面軍、第十一軍（湘桂作戦担当）の兵站病院数は九、第二十軍 三、第六軍 一、第二十三軍 四、第十三軍 十一、支那派遣総軍直屬 三、といわれている。